

## あ い ず ち

### ウィルウェーバー・エン

ドイツ語を或程度学習すると、一つの事柄を表現するのに如何な用語や文形が最も適切であるかということを考えるようになる。日常の会話、対談、討論、講演等話す場合はかりでなく、独作文、論文、報告、通信等夫々の目的に応じて表現の形式は異ってくる。然し共通している点は、このように表現すれば、相手は、又他の人は、どんな風にそれを受けとめるだろうか、更にそれに対して、もしもなされたとしたら、どんな言葉を使った返答が返ってくるだろうか、ということが無意識のうちに心の中で計算している。日本語であれば殆ど自動的に返答を想定しながらすらすらと表現できるが、ドイツ語を使う時には、あれこれと迷ったり、表現の方法が分らなかったりするの、それに対する相手の反応の表現が予測し難いからでもある。夫々の単語の独訳は辞書で見出せても、果してその場合にあてはまる語句であるのか、又はその場合は別の表現が使われるのかが分らない。これは日本語とドイツ語が文法的に又語彙において非常に異なるからという理由だけではないように思う。すなわち日本語を話す時にはあいずちがあるが、ドイツ語にはこのような話の進行方法のないことも理由の一つとして考えられると思う。

あいずちとは何であろうか。広辞苑によれば、「鍛屋で互いに打ち合わす鉋。向鉋，相の鉋。話の調子をあわせること。あい。あいずちを打つ，他人の話に調子をあわせること」とある。調子をあわせること，とはどういう表現であろうか。はい，いいえ，そう，そうですか，へえー，ほんとう，といった簡単な語も広い意味ではあいずちと考えられるが，むしろ聞き手として，受け入れ側として，何等かの思想の表現がなされることであろう。例えば次のような会話である。「昨日××へゆこうと思ってね，××駅で降りたら雨が降り出したんですよ」「まあ，それはいけませんでしたね，切角お出かけになったのに。で，傘はお持ちでしたか」「いえ，それが持ってなかったんですよ，そこでね，実はね」こうして会話はキャッチボールのように互いに受けとめあい，展開し合ってつづいてゆく。聞き手が，はい，とか，そうですか，等の一言だけで受けとめてゆけば話し手は不安になり，相手は興味がないのだろうか，不気嫌なのだろうか，と思いをめぐらすであろう。

ドイツ語でこのような会話が交わされたとしたらどんな受け答えがなされるであろうか。聞き手は ja, nein, wirklich? 等の一言に限って答えてゆくだろう。そして語り手が話そうとしたことを一と区切り話し終えるまで静かに耳を傾ける。勿論まなざしは相手の目の中におかれている。あたりへ目をそらしてはいけない。そうでないと話し手はそれに氣をとられたり，共に同じ方へ目をやるので，話そうとしたことが散慢になるからである。こうして話し手は自分が話そうとしたことを一貫して終りまでつづけることになる。事実，筆者は日常，家庭においてこれを経験し実行せねばならない。日本流にうっかりあいずちをうてば，相手はピタリと話すのを止めて，キッとした目で筆者をみる。「私の話を

## あ い ず ち

ことわりもなしに途中でさえぎるからには、何か重大なことをここで言わねばならないにちがいない、どんなことだろう」と思っているような表情をする。時には「話の腰を打るな、終りまで聞け。」と腹を立てる。あいずちを打たれると、そこで話し手は何を言おうとしていたのか、その瞬間混乱するらしい。

ドイツで研究所にいて、所長と対談をはじめると、所長は黙って筆者の話すことを聞き筆者の目を見ている。筆者は時には一貫した話題を終りまで話すのに疲れて来て一と息入りたいこともある。この時あいずちがほしくなる。でも所長は静かに私を好意的に見ている。そこで考えさせられる。自からの思想を表現するのに、あいずちによって息抜きをさせて貰いながら、話を展開し終結させる方法は甘えの形ではないだろうか。あいずちに馴れると、あいずちの無い会話に立ち向かう時、自からの思想を一貫して終末にまで順序良くまとめあげることには不馴れとなり、何となく心細さを覚える。

ドイツ語の教科書にとり入れられている寓話がある。シューマンとワーグナーが或る時話しあった。が、どうも良い工合に話し合えない。あとでワーグナーは他の人に言った。「シューマンときたら話し相手にならないよ。私が一生懸命話しているのに、彼は一言も言わないのだ。」これを聞いてシューマンは「あのワーグナーときたらがまんのならない人間だ。彼は一人でしゃべりつづけるので、こちらは一言も話せなくなるのだ。」これは単にワーグナーがおしゃべりであるという笑いだけではない。シューマンがどんなに聞き手としてのマナーを守り、羊の如く静かに聞いていたかということ、如何にもドイツ的な従順さを誇張している。

ドイツで自然科学関係の研究所を訪ねる。その実験室に各国の研究者がいることがある。アラビヤ人、インド人、エジプト人、韓国人、日本人等が実験機を並べて仕事をしている。各国人は夫々一応自分の研究課題について、何を何の目的でどんな方法で行ない、今こんな結果を得ているということを説明する。この時日本の研究者の処へ来ると、研究者はその説明を一貫して話せない。ポツリと切れてしまう。聞く方がそのあとを導火線となって引き出すと又一と言、二た言で切れる。しまいにはこちらが推測して話し、研究者が、はい、いいえ、を返すことになってしまう。他の国の人々のドイツ語は完全なものではないが、一貫した思想をまとめて終りまで言えるのである。聞き手のあいずちを必要としない。

薄層クロマトグラムが筆者のいたドイツの研究所で用いられ始めた頃、その T. A. (テクニカルアシスタント、研究者の実験の助手である。高校卒業後一、二年専門教育を受け国家試験に及第した免状を持つ職業で、独立して生活ができる給料が出る。若い女性が多くこの職を選ぶ。)の一人が、その研究者や他の T. A. も集まった処で薄層クロマトグラムの説明をした。それはよどむ処なく、切れることなく、誠に上手にその総てをまとめて、くわしく話を展開した。

ドイツで或工場を訪ねる。要件を話すと社長は女子工員にサンプルを持って来させた。ついでに工場を見学して行くよう筆者にすすめ、その女子工員に案内するように命じた。この十七、八才の若い女子工員は工場の入口で説明をはじめた。それは立て板に水を流すように長々と総てを話した。あとから考えてみれば内容的には説明の長さには比較すると大して充実したものではない。関係代名詞、関係副詞、従属接続詞、並列接続詞等を使って話をいくらでものばしてゆくドイツ語の話法である。これらの女性は特に話し方の訓練を受けた人達でもなければ高等な教育を受けた人達でもない。平凡な若い女性達である。こ

## あ い ず ち

のような例は限りなくある。従って大学の講義や、一般の講演にも淀みのない、長々とひきのばされたかのように聞える細々とした述べ方が要求される。その準備には誰しも多くの時間と努力を注がねばならない。くりかえしくりかえし原稿を小声で朗読しているのをよく見かける。とつとつとした話し方は歓迎されない。

家庭において子供は片言を覚え出す頃から両親をはじめ家族の会話を聞いて育ってゆく。ラジオ、テレビにもふれる。幼稚園や学校へ上るようになれば先生や友達との間の会話に入りこんでその環境は広げられてゆく。日本ではこの長年月の間にあいずちの会話が身についてゆく。あいずちのない会話はよそゆきの会話である。気を取り直し特別な注意を払わねばならない。講演、テーブルスピーチ、面接等あいずちを期待できぬよそゆきの場の為に練習をする。国際的な場において、日本人がすぐれた思想を持ち乍ら、あいずちがうたれないので、思うままを言いきれずに損をすることは限りがない。但しここで考えさせられることがある。日本人は外国語が下手であると言われるが、若しも誰もが容易にペラペラと上手に話せたらどんなことになるだろうか。至る処であいずちをうって相手を怒らせるかも知れない。

今後あいずちは次第に放棄されてゆくだろうか。これを日本の風土と考え合わせるとむしろ疑問である。四面を海にかこまれた島国として、又温帯に位置することから条件づけられて、四季の移り変りが規則的である。熱帯のように年間を通じて暑いこともなく、日本列島の主要部は北欧のように、春と秋が夏と冬のつなぎ目に短かく存在しているのではない。日本の四季は規則正しく三ヶ月毎に移り変ってゆく。これは家庭生活において衣食住を通じて最も身近に経験される。季節の移り変りに追いついて年中を、そして生涯を落ちつく暇もなく送る。常夏の国にみられる南方ぼけになることもなく、又一年の四分の三を冬ごもりのような静寂と団らんの生活に明け暮れることもない。日本特有の蒸し暑い夏は耐えがたいぎりぎりの線で終わりほっとして生きかえる。他方では、不完全な暖房のため寒さに耐えながらも死に直結している恐ろしい北欧の厳寒もない。生かさず殺さずの風土にむちうたれつつ、骨身惜しまず働らく民族性が培かれた。常に追いついてられながらよく働らき成果をあげるには何事によらず要点を掴み、早く、要領良く表現せざるを得ない。これを急ぐあまり、そして一貫した思想をまとめるまでのおちつきが得られぬままに、それをこま切れにして、各小区分をまとめてゆくのではないか。よし、分った、あとは胸三寸腹の中、という調子で、できるだけ言葉少なく要点を伝えようとする。そうして会話のキャッチボールはできるだけ多弁を避ける。この傾向は俳句、短歌に最もよく表現されている。日本には西洋風の長々と展開して、くどくどしく表現する詩が育たなかった。而も俳句や短歌は庶民のものである。新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、××会等と庶民が互いにふれあうあらゆる場において、誰でもこれを楽しみや喜びのよすがとすることができる。上は皇室の新年の御歌会や、又は歌人の作品発表から、下は日傭労務者の心の糧ともなる。又この文化は過去のものではなく、いにしえのころより綿々と伝えられて尚現在に生き、国民全体に息づいている。生きたすばらしい文化である。文学にたしなみがなくとも、誰もが、老若の区別なしに手がけることができるのである。これに比べると、ドイツの詩はそんなわけにはゆかない。詩人という専門家にゆだねられ、庶民はその作品を享受する。その表現の形式はいくらでもこまかく、縦から横から、上から下から、前から後からと言葉を重ねてゆく。これを和訳する時、その表現の長々しさ、しつこさにうんざりする。反対に俳句や短歌を独訳する時は言葉を補わねばならないことが多い。そして切

角の味わいの深さが平面的な文章になり下って興ざめてしまう。これは日本画と油絵の比較に似ている。油絵はこってりと色をブラシで塗り重ねて、表現に苦心をする。その作品は永遠に「問い」をはらんでいる。どこまでも試みを重ねてゆくことができるが、この度はここで一とまず止めておくと語りかけているようである。これに反して筆法のない、幾度も上塗りしてなぞった日本画は死んでしまう。一と筆一と筆が勝負である。そうになるとその一と筆に表現の最も要点とするエッセンスを抽出、濃縮してゆだねることになる。と同時にそれで打ち切りである。

文学を観賞する時にもこれらのくせは我々をあやつる。ゲーテの「若きヴェルテルの悲しみ」を読むと、ヴェルテルが愛するロッテに、遠く、近く、愛を告げて自分のロッテとすることができないために如何に悩み、自分を自殺にまで追いつめてしまうかが、一冊の本になって長々と、くどくどと画かれてゆく。ゲーテなればこそ、読者を飽きさせずにひきつけてゆくのであろうと溜息をもよおしつつ読み進む。一方日本の文学を読む時よく聞かれるのに「このような簡潔な筆使い」、「余計なつけ加えをせずに、簡素な写真である」、「短かい中にうまくまとめられている」等例をあげれば限りがない。下手をすれば長々しくくどい文章になるところを、如何に上手に短かい表現に而も意を尽してまとめあげられているかということを賞嘆し、解説されることが殆どであるといつて良い。

ここに述べてきたあいずちは話し相手にしてもらうものであって、これを他発性あいずちとすれば、今一つ自発性あいずちとでも言えるものがある。これも日常至る処で使われている。それは公けの場、例えば放送、講演、講義、対談、討論の場においてもしきりに使われる。えー、あの一、まー、まーあの一、この一、その一、えーと、あのですねー、シー（これは歯と歯の間から空気を吸りこむ音である）、言葉の語尾を長くひくこと（例えば私はァーこのォーところでェーこんにちィー皆様にィー）等がそれで、言いはじめ又は話の途中等どこへでも自由に入れてゆける。相手の世話にならないでもよく、自作自在である。但し、これらの語が入ると、話の腰を自からの手で折るようなもので、話は迫力を失ない退屈になる。国会の討論に「あの一」等が殆ど入れられないのは、説得力が弱くなるからであろう。ドイツ語にはこれらに類する他発、自発のあいずちはあまり無い。nicht wahr?, ja, gel? (南ドイツ), nicht? 等使われるが、なるべくつけないほうが良いとされる。

西洋、日本を問わず自からの思想を一貫させ全体を掴んでいるとき、又相手を説得せねばならない時、他発、自発のあいずちは自然と影をひそめる。何事によらず、あいずちを入れる時は甘えの心理があるのではないか。甘えは日本の地現的条件や風土から生れた宿命であるかも知れない。外国の文化や文明の導入に息づく暇もなく、骨身惜しまずこの二千年近くを過して来ればそれは民族性ともなってしまう。そして追いかける者の心の底には、コンプレックスが甘えの根源として、心情に芽生えるのではないか。

あいずちは話す時に使われるものであり、一つの思想を一貫せずに、切れ切れに相手の反応に応じて展開してゆく。そこには伸縮自在の融通性があるが、一つの思想を頭の中にまとめて一貫して話すことに不馴れとなる。物を書く時にも無意識の中に考えがゆれ動き甘えの心理が働らく。又文学をはじめすべて書かれた物を読む時にも、その観賞のよりどころが異ってくる。ここに日本語とドイツ語の根本的な思想や見解のくいちがいが生じて来る。真にドイツの文化にふれ、文学その他を観賞するには、あいずちの甘えをふりすてることができなければならないのではないか、という処に到達する。

引用文献

広 辞 苑

Leben wir Deutsch!: 同学社 p. 28—29

リズム : WILLWEBER, En 大手前女子大学論文集 7 号, 1973

静かな憩 : WILLWEBER, En 大手前女子大学論文集 8 号, 1974

ドイツ語の発音 (Ⅱ) 促音便 : WILLWEBER, En 大手前女子大学論文集 9 号, 1975